



Title	国語問答(翻訳-7)
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1984, 9, p. 17-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93878
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国語問答(翻訳—7)

中 岡 省 治

これまで6回に亘って Juan de Valdés 著, *Diálogo de la lengua* の翻訳をおこなってきたが、以下はその続きである。

この翻訳には、Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, edición y notas de José F. Montesinos, *Clásicos Castellanes*, No. 86 (Madrid, 1953) を底本として用い、これ以外に、J. de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Biblioteca Clásica Universal, No. 12 (Prólogo y notas de Felix F. Corso; Buenos Aires, 1940), Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, *Clásicos Ebro*, No. 18 (Selección, estudio y notas por Rafael Lapesa; Zaragoza, 1965), Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, *Clásicos Castalia*, No. 11 (Edición, introducción y notas de Juan M. Lope Blanch; Madrid, 1969) を適時参考とした。とくに Buenos Aires 版と Zaragoza 版にはかなり詳細な註があるので、註記作成のうえでも実に貴重なものになっている。

この言語問答には、Valdés と他に三人、Marcio, Coriolano, Pacheco とが参加するが、夫々の問答者は訳文では当該の頭文字で示している。なお今回の訳出部分は上記テキストの 157 ページ16行目から、179 ページ 8 行目までに該当し、Valdés がイスペイン語独特の統語法のひとつといわれる *acusativo personal* について話すところから始まる。

V. その通りです。この点、とくに、一部の対格の前に付けるべき *a* を落してしまう人がありますが、これは間違いなのです。つまり、正しくは “*El varón prudente ama a la justicia*” というべきを、彼らは “... *ama la justicia*” といってしまうのです。このような話し方には、もうお分かりのように、二種の解釈を生むおそれが生じてきます。ひとつは、“思慮深い男子は正義を愛す” というもので、もうひとつは、“正義は思慮深い男子を愛す” というものです。その理由は、この *a* がないと二つの名詞とも同じ格になってしまうからなのです^{註1}。また、二つの品詞を続けて並べたがため、これがひとつの品詞のようになってしまい、読み手を戸惑わせるおそれがあるようなら、これも適切な言い方ではありませんね。

C. お話の内容を十分に理解するには、何か例をお示しいただく必要がありますね。

V. 例といえば、たとえば “*es bien*” といわねばならぬ場合には “*bien es*” とはしないこと、また “*es verdad*” と書いて済むときには、“*verdad es*” とはしないこと、“*es mal*” の場合には “*mal es*” とはするなということなのです。というのは、これらが名詞の複数ととられたら大変ですからね。私としては、他に多くの例を出せますが、しかしこちらの意とするところを分かってもらうには、上に挙げたもので十分です。名詞の格にそれに合致した定冠詞を付さないことで、やはり書き手の意図するところがいろいろに解釈されるおそれが生じてくることがあります。したがって、正しく書こうとする人は、私が前にいったように、定冠詞を常に正しい形にして使わねばなりません。つまり、主格では *el* と *lo* とを、属格では *del* と *de la* とを、対格では *al* と *a la* を、中性では *lo* を使って、“*Dixo la leche al vino : bien seáis venido, amigo*”^{註2} という諺を使う場合にも、*la* と *al* の使うべき箇所をはっきり区別しないとイケないということです。私のいわんとするところ、お分かりいただけましたかな。

C. ええ、十分に。

V. 次にいって、ラテン語では2個の否定は肯定になることを知っているからか、そうなる教えられたからなのか、カステイリャ語でも同じだと思って、否定辞を2個重ねて使うのを避けるため、かえってこれで妙に文体をくずしてしまう人がありますが、これはよくありませんね。たとえば、“*No diga ninguno : destâgua no beberé*” というべきなのに、“*No*

diga alguno ...” 註3 とするような場合がこれに当たります。これは皆さんお分かりのように、不注意きわまることなのです。つまり、すべての言語がまったく同一の特性を備えているわけではなく、むしろ、その特徴は個々の言語で違ってくるので、ここからまさしくその違いを称し“特性”註4 というのですからね。ですから、ラテン語は2個の否定辞を使って肯定を表わしますが、ギリシア語では否定がなお強調されることになります。これは、カスティリア語でもヘブライ語でも同じことなのですよ。

P. もし指摘されたことが重大な誤りになるのであれば、私はこれまで何度となくその誤りを犯していますね。

V. そうです、重大な誤りといえるでしょう。ですから、そうならないよう気を付けることです。しかし、私の考えるところ、このことよりもなおひどい誤りで、そこにはまり込んでしまう人が今みたものの場合よりもなお多いので、十分に気を付けてほしいことがあります。つまり、もともと動詞は文尾にはこないのにこれを文尾におくことなのです。これは間違っラテン語を書く人の真似をする人によくあることですが、避けるべきですね。

M. その点をもう少し詳しくご説明いただきたいですね。

V. つまり、“*Siempre te bien quise y nunca te bien hize*” 註5 のような言い方は避けるべきだということです。というのは、“*Siempre te quise bien y nunca te hize bien*” という方がずっといいのですからね。

C. その二つの言い方はまったく同じことを意味するのでありませんか。

V. そうです。しかし、そんないい方はウレニャ伯註6 のお気に召さないこともありましてね。

M. すると、そのウレニャ伯のお話とか、お聞かせ下さい。

V. よろしい。ウレニャ伯爵が旅行の途中で、とある村を通ったとき、食料が乏しくなっていたので、二、三日前に召しかかえたばかりの執事をやって、食べ物調達しようとしたところ……

M. 以後はご教示にしたがい注意いたします。では続けて、あなた様がカスティリア語の文体についてお考えのところをお聞かせ下さいませんか。

V. ではそのことをお話しして、私のこの愚にもつかぬへりくつを終えたいと思います。さて、カスティリア語を正しく話すための要提はひとつ、できる限り少ない単語でいわんとする内容を表わすことにあります。この

場合、あなた方の心の思いを十分に説明し、いわんとすることを述べるに際しても、一文、即ち、ひとつの話の中に使ってくる単語については、そのうち一語でも外せば、その文の意味が、あるいは表現力が、あるいはまた優雅さが損なわれてしまうほどの推敲が必要だと考えたいですね。

M. もっと具体的にご説明下さい。

V. 分かりました。喜んでいたしましょう。もしあなた方が、“Ama a quien no te ama, y responde a quien no te llama” 註7 という諺から何か単語を外そうとしても、何かが欠落したらそこで文が意味をなさなくなるのが分かると思います。今度は、“Quien guarda y condensa, dos veces pone mesa” 註8 という諺では、guardar と condesar とは同じことですので、もしあなた方が、このうちひとつを落したとしても、文が意味をなさなくなることはないけれども、同じひとつのことを意味する並立の二語が作り出してくる力感は、消えてしまうことでしょうね。同じように、“Qual la madre, tal la hija, y tal la manta que las cobija” 註9 から tal を外したり、“Del monte sale quien el monte quema” 註10 から第2番目の monte を外したりしたら、文意を損なったり、力感を低下させたりすることはなくとも、文体が崩れてしまって、文そのものは均り合いを欠いたものになってしまうでしょうね。

M. それは実によく考えられたお話だと思いますね。しかしここに挙げられた諺は、全部が同音韻をふんでいるように私には思えるのですが、こんな韻を合わせた書き方はいいことだとお考えでしょうか註11。

V. もちろんいいことです。このような短い文ですからいいのですよ。しかし、正しく書き話そうと願う人には、そんなことはお控えなさいと忠告したいですね。というのは、こういう短い決まり文句では認められても、これ以外の場ではカスティリア語の文体にはまったく無縁のものなのですからね。

M. ですが、このような書き方を使って、この節、本を出す人がいるのはどういうことなのでしょう。

V. それはですね、ラテン語の正しい文体とはまったく無縁のことごとを使って、しかもラテン語で本を出す人がいるのと同じことじゃないでしょうか。

M. なるほど、ごもっともなお答えです。さて、この世界の言語全部に

みられることですが、事実、余人よりも文章を上手に、しかも的確、流麗に書ける人がいますので、新しい言語を習得したいと願う人は、そういう人の出した本を読んだらいいと思います。しかし、まずどの本を読むかを、慎重に考えてみる必要もあるようですね。というのは、私たちが日常、話を交わし、おしゃべりをする人たちの習慣が、大なり小なり我々の習慣となってゆくように、我々の読む本もそれなりに我々の文体となってゆくようですから。

V. あなたの言、まぎれもなき真理ですね。

C. そのようにことばの習得と読むものとのかかわりが大きいとお考えなら、今日のあなた様のお仕事を仕上げられる意味でも、カスティリア語の本のうちどれが、私たちが読んで正しい文体を身に付けるのに役立つか、またどんなものは読むのを差し控えるべきだとお考えになっているかについても、お話しいただきたいですね。

V. それは、あなたが考えているよりもずっとむづかしい質問ですね。あなたもよく知っているように、他人の書いたものに評価を下すなんて、迷路に入ったのと同じことになるのでして。

C. あなた様のおっしゃることは、その評価とやらが公けになった場合のことです。しかし今は私たちだけ内輪ですし、何をおっしゃっても構わないと思います。

V. では、この問題について私が今からいうことは、私の口から出たものでないということにしてくれるという条件でなら、カスティリア語の作家についての私の意見をお話ししてみましょう。皆さんもご承知のように、人々の好みは多種多様で、これと同じく人々の判断も千差万別なのです。ですから、ある人が可とすることをもう一人が否としたり、甲がよろしくないと考えることを乙がいいと見做すことなど、よくありますね。そんな訳で、私は世間の人みなと仲良くしたいと常々願っている者として、あなた方を喜ばせられても、他の人たちを怒らせてしまうようなら、これも望むところではないのですから。

M. 安心してお考えのところをお聞かせ下さって結構です。私がこの3人を代表して、秘密を守ることを約束いたしますので。

V. では、その約束を信じて考えていることをお話ししましょう。すでに皆さん方も知っているように、カスティリア語で書かれているものには、

大体三種のものがああります。そのひとつは韻文、もうひとつは散文で、ここには元々カステイリア語で書かれた創作物と実録物とがみられるのです。3番目には他の言語からの翻訳があつて、これは、とくにラテン語からのものが多いのです。私は、ことばを習っている途中の人には、カステイリア語にせよ、他の何語にせよ、韻文を読むのはいいこととは思いませんよ。

M. 私もずっと前からその意見なのです。

V. しかし、いろんなことに触れる必要があるのでいっておきますが、韻文を書いた人々のうちでも、とくに Juan de Mena 註¹² にみなが喝采をおくるようですが、私の考えでは、なるほど、その理論や高い調子の文体の点では、そのような評価に価はしても、正しい言い方、的確で自然な語彙の使用という点では、私は彼をそんなに高くは買いませんね。というのは、もし私が間違いでなかったら、彼はこの語彙の使用の面で、少なくともその作品、「運命の迷路」では注意を怠ったようですからね。つまり彼は学問のあるところを見せようとして、実にあいまいな書き方をしたので、その作品は理解しえなくなっているし、また品が悪くて使うべきでないといえるような単語、ラテン語臭が強くて、普通一般には分からないような単語などを創り出してきたのです。たとえば、rostro jocundo, fondón del polo segundo, cinge toda la esfera のようなものがある歌の中に入っていますが註¹³、これは、私には、正しいカステイリア語などとはかけはなれた、間違つたラテン語的な単語としか思えませんね。歌集大全註¹⁴ に載っている恋の歌のカステイリア語は満足すべきもの、いや、まったく非の打ちどころのないものです。この歌集大全には、Garcí Sánchez de Badajoz 註¹⁵ や得業士 Torre, Guevara, Astorga 公爵の作品のように立派な文体の詩がいくつか入っています。但し、このうち、Torre と Guevara のものは文体の点よりも、むしろ歌の内容そのものに見るべきところがあるかもしれませんね。また Jorge Marrique 氏の作で、“Recuerde el alma dormida” で始まるものは、上に挙げたものよりも優れていて、文体の点にあわせて内容の面からいっても広く読まれ、鑑賞されてしかるべきだと思いますね。Juan del Encina は沢山の作品を書いたので、その作品はあれこれ多くの分野に亘っています。しかし私が一番いいと思うのは、ローマで彼が書き上げた「Plácida y Vitoriano」と呼ばれる道化芝居です。Torres Naharro がその作「Propaladia」でみせる文体は、その登場人物の役柄を十分に描

き出していないという点では、戯曲としていく分かの欠点がありますが、これまた、私には立派なものと思えますね。とくに平たく、気取らずに書き上げているところが魅力ですが、なかでも「Calamita」、「Aquilana」という芝居では、他に彼がいろいろな書き方を試みている作品と違って、その魅力がはっきりとえかがえて、いいですね。但し、ここでもっと適切な言い方、つまりもっとカステイリア語らしく、明晰に、平易にいえるののにと思える箇所もないではありませんが……

M. そのうちひとつをご教示下さい。

V. 「Aquilana」の中に次の一節があります。

Pues ¿ que's esto ?

Tórnome loco tan presto

por amores d'una dama

que tarde niega su gesto

lo que promete su fama.

(おや、これは何たることか。

私め、さる女性に恋心を燃やし、

かくも早きに気も狂わんばかり。

その女性の美しき顔は打消すこと難し、

彼女の評判を保証せしものを。)

ここでは、もし私が間違っていないとしてのことですが、次のようにすれば、もっと適切で、明確で、すっきりとした言い方になるんじゃないでしょうか。終りの2行を、

que trae escrito en su gesto

lo que publica su fama.

(彼女はその顔の表情に書き表わしたり、

彼女の評判を明らかにするものを)

P. そちらの方がずっといいでしょうね。しかし、彼がカステイリア語の啓発に努めたこと、このことは否定できませんでしょう。

V. 勿論そのことを否定するつもりはありませんよ。そのうえに、彼が平素よく付き合っていた人々の間に起った、低俗で、下品なことごとを巧みに書き表わしている反面、身分の高い、上流階級の人々の間でのことごとを書くのは、少々不得手であったということをも、私は皆さんに認めて

ほしいと思いますね。これは「Aquilana」の中に頻繁に現われてくることですから。しかしこのことは今はどうでもいいのです、というのは今はカステイリャ語についての話なのですからね。その他に韻文で書かれていて、立派なものも沢山あるようですが、その多くは印刷にもなっていないし、また私の話がくどくなってもいけないので、ここでは、「Fileno y Zambardo」^{註16}という道化芝居が私には仲々いいと思えるということだけを申しておきましょう。

P. Yanguas ^{註17} についてはどうお考えですか。

V. 何かラテン語みたいな感じがします。

P. そうですか、お考え分かりました。

M. どのようなものが、よく出来た詩で、どれがよくないものかを見分ける手がかりをお教えいただきたいのですが。

V. よく出来たものとしては、意味する内容もよく、明快で、使っている単語も十分その内容に合致し、文体も正則で、余計な語を使わず、韻を踏むためだけの余剰な音節もなく、同音韻を作るために無理に使った語もみられないものをいいたいですね。ですから、出来の悪いものは、このような条件を備えていないものとなるのです。とくに私は意味する内容もよく、明晰なものといいましたが、これは、一見すると何らかの意味を表わしているような詩でも、実際にその意味を調べてみると、何の内容もないものがあるからなのです。これを、あなた方、確かめたいというなら、私がイスパニアを出たときに、音楽家の間で大流行していた、次のビリャンシコを聴いてみることですね。次の歌から私のいっていることがどんなところにあるか、考えてみて下さい。

Pues que os vi, merecí veros,
que si, señora, n'os viera,
nunca veros mereciera.

(あなたにお会いせし故、私はあなたに会うに相応しき者となれり。
奥方様、もしあなたにお会いしていなくば、
私、永遠にあなたに会うことかなわぬがままにおりしものを)

M. 私は仲々うまく出来ていると思いますね、一体どこが欠点なのか分かりませんが。

V. 最初の“Pues que os vi, merecí veros”となっている行が、“Porque

os vi, merezco veros” となっていないことには、あなた満足のゆくものなどとはいえませんよ、というのはね、あなたもよく分かっているように、ここでは詩の内容をはっきりと、恋の歌とすべきですからね。しかし、このままでは、私何もいったことにはならないと思うし、そのうえに、作者が初めの1行で断定したことの反対のことを、次の2行でいうことになってしまうと私には思えるのですよ註18。これに類するものを他に沢山挙げられますが、こういう詩は、私が先にこうすべきだといったこと、つまり、単語を歌の内容に合わせて使ってゆくことをせずに、これとは逆に、ことの内容を単語に合わせてでっち上げる人々から生まれたものなのです。こんな場合には、ですから、自分のいわんとすることはいえずに、単語の意味だけが浮き上がってしまうことになるのです。

P. なるほど、お話ごもっともですね。よく分かりました。

V. ただ詩行をふくらませたり、同音韻を作ったりするのにだけ使われる単語や品詞類は、皆さんも分かることでしょうが、何ともはや困った代物ですね。この点を理解してもらうために、次の詩をみてもらいましょう。

Destas aves su nación
es contar con alegría,
y de vellas en prisión
siento yo grave pasión,
sin sentir nadie la mía.
(彼の生来の業は、これら鳥につき
楽しく歌い上げることなれば、
その鳥が虜れおるをみて、
吾、深き悲しみを感ずるも、
誰一人吾が悲しみを想わず) 註19

この詩で、“生来の性質”の意味をもたせて、prisiónとpassiónとに韻を合わせるために“nación”を使っていますが、これは不適當な使い方です。次の歌にも同じようなことが現われていますよ。

Ninguno haga mudança
por mal que vea de sobra,
mas tenga tal esperança,
que lo que razón alcanza

la vida todo lo cobra.

(何人も慌てふためくことなし、
 いかに多くの不運に直面すとも。
 いやさ、希望をしかともち、
 人の世の道理がいう如く、
 人生がすべてを回復するを願うべし) 註20

2行目に *de sobra* といって、これに“あり余った・余計な”の意味をもたせていますが、これも *cobra* と同音韻にするためだけのことなのです。したがって、カステイリア語の詩法の真髄は、散文としても通るものにすること、また詩として書いても散文と同じような言い方で表わすことにあるといえるようです。この意味から、私は詩歌大全に収められたロマンセの多くを、正しいカステイリア語を使った作品だと考えているのですよ。つまり私は、そのロマンセでの、話しの続き具合や平易な言い方に何ともいえない魅力を感じますし、また、そこに使われる平俗語 (*romance*) が生粋のものであるということをいうために、歌にまでロマンセ (*romance*) という名が付いたのではないかと、私としては考えるのでしてね註21。歌 (*canción*) については満足のゆくものは少ないですね、というのも沢山の下品で、低俗ないい方、詩歌に相応しくないものが入っているからなのです。酒落歌 (*mote*) 註22 のうちには、仲々に優れて、単語のかけ合いも上手なのがありますね。創案歌 (*invención*) にはいいのもあれば、よくないものもあり、問答歌 (*preguntas*) には秀逸といえるものが少なくありません。ビジャンシコ (*villancico*) も、全体としてみると、無視してはならぬものです。しかし、皆さん方にいっておきたいのは、これまでに私が挙げた規則を守っていない場合が、これはいいといった作品の中にもあるかもしれませんが、これに驚くことはありませんよ。というのも、この種の誤りは、一部には、時の経過の中で起ったと考えるべきものだからです。つまり、時の経過と共に細かいところに払われるべき注意がおろそかになってしまったということなのです。これと共に、印刷屋にもまた責任があつて、彼らは正書法の点だけでなく、自分たちの分からないことをいい加減にして放っておくことも多いのですからね。

M. そのことですが、私たちがラテン語を扱う場合にするのと同じ間違

いだと思いますね。

V. これで詩形については十分でしょう。散文については、平俗語で書いてあるものを私はあまり読んでいないのですよ、というのも私はラテン語とイタリア語が分かりますので、平俗語であるカスティリャ語のお世話になることもないからなのです。この平俗語で読んだごく僅かなもののうち、2点が私には気に入っているのです。これは文体の点でもカスティリャ語として最高のものだと思いますし、またとっても上品な表現の仕方をし、ラテン語で書いてある事柄にも、実に適切なカスティリャ語の単語が当てられているからなのです。そのひとつは、ボエティウスの「哲学の慰め」です。これには、2種の翻訳がありますので、私がほめているものは原典の韻文は韻文で、散文は散文に訳しているもので、Ureña 伯に献呈されていますね。

M. その訳者の名前は何というのですか。

V. 今はうっかりして覚えていませんが、鋭い創造力と、明晰な判断力を備えた人であったということだけは断言できますね^{註23}。

P. では次にいって、ここでは話題から少し外れるかもしれませんが、ずっと前から知りたく思っていたのでお尋ねするのですが、創造力(ingenio)と判断力(juicio)との間にどんな差をつけておられるのでしょうか。

V. 創造力とは何をいったらいいかを見付ける力をいい、判断力はその創造力が見付けたもののの中から一番いいものを選び出し、これを適当な場に据える役目をします。ですから、雄弁家の必要とする2つの資質、つまり創出と配置、とくにこの配置とは順序付けのことですが、この二者のうち最初の創出の方は創造力から生じ、後者の配置は判断力にかかってくるといえるでしょうね。

P. 立派な創造力をもちながら、判断力に欠けたり、これとは逆に立派な判断力をもちながら、創造力に欠ける人もいるとお考えですか。

V. そんな人は山ほどいますよ。あなた方の知人で毎日ことばを交わしている人たちの中からでも、何人かは名を挙げようと思えば、できますよ。

P. すると一個人の場合、創造力の欠除と判断力の欠除ではどちらが大きい欠点となりましょうか。

V. もし私にどちらかを決めよといわれるのなら、判断力は凡庸だが、

創造力が優れている場合よりも、創造力は人並みでも判断力が優れている場合の方を買いますね。

P. その理由はどこにあるのですか。

V. というのはね、創造力にたくましい人たちというのは、判断力に欠けるくらいがあつて、これがために異端や根拠のない説などにかぶれ易いからなのです。人が宝としうる最高のものは、優れた判断力をおいて他にはないのですから。

M. それはそこまでとして、あなたのお話しの書物の件ですが、お気に入りだと申されていたラテン語からの翻訳のうち、もうひとつには何があるのでしょうか。

V. アルコルの大執事僧^{註24}がカスティリャ語にしたエラスモの「Enquiridion」です。これは、私の考えでは、とくに文体の点で、原典のラテン語にも匹敵しうるものだと思いますね。

M. ですが、そのカスティリャ語の文体が、ラテン人が原典のラテン語の文体に対して感じたもの以上にでないとしたら、それを翻訳した人は大した仕事をしなかったということになりますからね。

V. どうもあなた方は、イタリア人ではない人が、ラテン語で優れた文体を披瀝するのを認めたがらないようですね^{註25}。

M. 他に、カスティリャ語の翻訳を読まれて、これはいいなと思われたものはありませんでしょうか。

V. 読んではいますが、名前は思い出せませんね。

M. ですが、私は、Peregrino の翻訳、Cortesano の翻訳がとっても立派に出来ているという話をきいたことがあります^{註26}。

V. 私はその2点を読んでいません。いいですか、まだそのうえに、何語からの翻訳にせよ、他のどのことばに直すよりもカスティリャ語に翻訳する場合の方が、推敲はしにくいのですからね。

P. なぜですか。

V. いいですか、つまりカスティリャ語の魅力と品性とは、その多くが隠喩を用いて表現する点にあるとされていますが、翻訳者は原語で書かれている以外のものを付加できないので、ここでいう魅力を出し、磨きをかけようとしても、自分が始めから書くような具合には、うまくはゆかないのですよ。たとえば、もしテレンティウスの、「Idne estis auctores mihi ?」

を翻訳しようとする場合、逐語的に訳したら、“¿Desto me sois autores?” となりますが、これではこの詩人のいい表わしたかったことが分からないと思います註27。しかし、もう少し意味をとってその一節を、“¿Esto me aconsejáis a mí?” としたら、詩人が感じたのと同じ内容となりますね、もっとも別の単語を使ってしまうことにはなるのですが。これと同じように、テレンティウスの一節、“O factum bene, beasti (me)” を翻訳して、“¡O como está hecho bien! Asme hecho bien aventurado” と直しても、本当のカスティリャ語の話し方にはなっていないし、詩人がいい表わしたかったことを十分に表現していることにもならないのです。註28 これは単語にとらわれず、意味をくんでいえば、“Está lo mejor del mundo, asme dado la vida” となるのですからね。

M. なるほど、本当によく考えられた、ごもっともなお話だと思います。

V. あなたのご賛同を得て私も嬉しいですよ。

P. ですが、カスティリャ語に翻訳されたものののが沢山あるのに、そのうちたった2点しかお気に召さないとおっしゃるのには、私少なからず驚きました。といいますのも、神の教を伝えるものには、「使徒書簡」や「福音書」、「カルト教派教義書」、「聖カタリーナ書簡集」や「聖ホアン・デ・クリマコ書簡集」、聖ヘロニモの編した「教父列伝」、これに加え、他にも沢山の優れたものがあるし、一般的なものとしては、リビウス、カエサル、バレリウス・マクシムス、キントゥス・クルキウスのもの、これ以外にも多くの作品があるのですからね。

V. 残念ながら、私はそのうちどれひとつも読んだことがないので、ほめたりできないのです。だから、あなたも驚ろかれることはないし、私には勝手なことをいわせておけばいいのですよ。作者が自分の発想をもとにして書いたもののうちで、一般に広く、優れた文体をもつと考えられるのは、「Amadís de Gaula」の4巻です註29。これは、いろいろと不自然にきどった箇所や不注意な箇所もありますが、やはり世評の通りだと思いますね。つまり、文体を天にも登るかと思まごうほど、派手に高めたかと思えば、次にはそれを地に落してしまうといったこともあります。が、「Amadís de Gaula」の4巻本と、私としては相当立派なところまでいっていると思っ
ているあの「Palmerín」と「Primaleón」註30 とは、今後ともずっと優れたものとして推称してゆく気持ちに変わりはありません。こんなにいうのも、

「Esplandión」, 「Florisando」, 「Lisuarte」, 「Cavallero de la Cruz」^{註31} なんかよりもずっと優れていると思うし, 「Guarino mezquino」, 「La Linda Melosina」や, 「Trapisonada y Oliveros de Castilla」をも含む「Reinaldos de Montalván」^{註32} のようにいい加減で, 嘘だらけの書物よりもずっと勝れたものと平素から考えているからなのです。なかでも, ここに挙げた「Guarino mezquino」以下のものは, 嘘八百を並べているうえに, 破廉恥な話を書き立てようとしたり, 奇想天外な文体を編み出そうとしたりして, かえって書き方まで乱してしまっているのです, 良識のある人には読むに耐えない代物になっているのですよ。

M. あなた様は, それらを読まれたのですね。

V. ええ, 読みましたとも。

M. 全部をですか。

V. そうです, 挙げたものの全部を読みました。

M. そんなこと, 本当にできるのですか。

V. 私の生涯の最良の時代の10年を, 私は宮廷に仕えて過しましたが, この間中, 私はこういう嘘っぱちを読むことだけに没頭し, それ以外のまっとうな仕事はしなかったのですが, この本読みがすっかり気に入ってしまって, 他のことは何も手につかないくらいでしたね。いいですか, あなた方, 好み, 趣味がかなえられないとどうなるか, 考えてみたらどうですか。私の場合, もしラテン語からの翻訳で, 正真正銘の史家や少なくともそう目される人々のものだけを与えられるとしたら, とうてい終りまでは読み切れないことでしょうね。

M. それはごく当り前のことなので, 私たち別に驚きもしませんが。

P. あなた様が「Amadís」についておっしゃったことに私は驚きを禁じえません。というのは, 私はこれまでそれがほめたたえられるのばかりを聞いてきました。ですから, あなた様にとってご不満の単語のいくつかや, 文体の点でご不満の箇所, またここは間違っているとお考えのところを, 作品の中でご指摘いただければ有難いですが。

V. えらく面倒で, 長い時間をとる話を持ち出しましたね。

P. そんなことありませんよ, 長いといっても, あと余すところは, せいぜい今からでは, 私たちがナポリに向って帰途につくまでの時間しかないのですからね。

V. では、皆さんがご希望の様子なので、最初の2章だけに限って、求められたこと全部をお話しすることにしましょう。単語の面では、“*estando en aquel plazer o regozijo*”(そんな風に楽しんでいると)といえるのに、“*estando en aquel solaz*” 註33 としているのが気に入りません。“*Quando vió ser sazón*”(その時・時節になったのをみたときに)としているのも気に入らないところで、この *sazón* は別のところでも使っているように、“*a aquella sazón*”(その時に)として使う方がいいのです。こういう場合よりもなお、私の気に障るのは、“*todo lo que me toca*”(私に関すること)の意味で*hacienda*を使い、“*en vos dexo toda mi hazienda*” といっていることです。また、*avía venido* , *avía passado* に代え、*viniera* , *passara* というのも私にはいいとは思えないのですよ註34。 どうですか、私の考えにご賛同いただけますかな。

P. いいえ、賛成いたしかねますが。

V. なぜですか。

P. と申しますのは、もしそれらの語彙がその本の書かれた時代に、カスティリアで使われていたか、あるいは、すでに当時では使われていなくとも、いつの時代かに使われたとしたら、著者としては、彼の時代の話し方にその表現の仕方を一致させるためであっても、あるいはその書く内容の古さを表示しようとするためであってもいい、とにかく、その本の作者は上に挙げられた単語を使う十分な理由があったものと思いますね。ですから、そんな単語の使い方がよろしくないとして、その本の作者を攻撃されるのは筋違いではありませんか。

V. もしこの今の時代には使うべきでないものと私が考えているとしたら、それはいいでしょうか。

P. ええ、それなら結構ですよ。ですが、その本の著者がそういう単語類をその本の中に使っているといったら、著者を攻撃されないということを条件としてのことですが……

V. 分かりました、そうしましょう。その本の著者がそういった単語を使ったのは正しかったのだということと、また彼が本を書いたその時代には、それらの単語は正しいものと見做されていたのだらうと、こちらも思い直したということ、ここで改めていっておきましょう。また、皆さん方はこれらの単語やそれに似た他のものも、決して使わないようにした方

がいいということをも、いっておきますからね。また文体の点では、動詞をわざと文末にもってきている箇所がありますが、私にはこれが気に入りませんね^{註35}。これは、次のように、“... tiene una puerta que sale” a la puertaとすればいいのに、“... que a la huerta sale”として、本当によく出てきますね。私にはまた、文を省略したままで放置しておくのも気に入りませんね。これは冒頭の詩の3行の中にもみえますが、まずこうなっています。“... el qual, siendo en la ley de la verdad de mucha devoción y buenas maneras acompañado. Esse rey...”^{註36} というくだりでは、siendoに呼応するeraがあるか、それともsiendoの代りにeraとなるかのいずれかでないといけないと思いますよ。これに加えて、本来のつながりの接続詞以上の意味をもたせたeを使っているのをみかけますが、これも私は嫌ですね。それは、“este rey ovo dos hijas en una noble reina, su muger, e la mayor fue casada con...”とに現われているのですが、これは“...de las cuales la mayor...”とすべきなのです。ここでeを使っても意味はよく分かりますが、これもeにそのような意味があるからではなく、物を書く人たちの慣用が続いてその結果、そんな意味をも表わすことになったからなのです。しかし、皆さん方も分かるように、“...de las cuales...”とする方がずっといいし、上品な使い方ともなるのですからね。“Si vos me prometéis”に代えて“Si me vos prometéis”としたり、“de no descubrirlo”に代え“de lo no descubrir”としたりする言い方も、私には間違っていると思えますね^{註37}。あなた方、私のいったことをどう思いますか。

P. よくお考えになっておられると申し上げたいですね。但し、そこには昔のものということで、常に大目にみてしかるべき余地もあるわけで、この古いものというところは、どんなことがあっても否定はできないのですからね。

V. いやいや、古いということで受け入れられる点はすべて、喜んで受け入れますからね、ですから全部がそうなればいいのにと願うくらいですよ。しかし今からお話しするこの点だけは、どうにも致し方ありませんね。

P. どうぞお話し下さい。

V. いいですか、ここでの内容が内容だけに、こんな嘘の物語りを書く人たちは、その話をできる限り真実に近くなるように作って、それで本当

にあったこととのようにして売り込もうとするのです。しかし、問題とする「Amadís」の著者も、不注意があったり、またその他の理由などから、明らかに嘘と分かることごとを書き連ねているので、皆さん方にもそれが決して本当のことではないと判断がつくはずですよ。その本の最初に書いてあることで、その物語は、我らの救世主の受難註³⁸の後あまり年月を経ずして起ったとなっているところですが、これは無知も甚だしいのですよ。というのも、著者がそこでキリスト教国であるといっている地方の一部は、その受難があってから長年月を経た後に始めてキリスト教に帰依しているのですからね。ペリオンとエリセナ註³⁹の恋のことごとで節度を守らないのも、これ著者の手落ちだと、私考えますね。というのは彼女エリセナを王の娘としたことをも忘れてしまい、作者は彼女がその父の館に居るにもかかわらず、あんな風に放埒な行動をとらせ、彼女をはしたない娘にし、ついには彼ペリオンと話を交わした最初の夜に、もう彼と閨を共にさせてしまうのですからね。また著者の不注意とすべき点ですが、この恋は人目をはばかり、娘の家で進展していることをも忘れてしまって、作者は彼ペリオン王が、そこに娘がいると分かるとすぐ、剣と盾とを床に投げ出してしまったと書いています。しかし、こんなことをすると物音を立てて、近くに寝ている人々の眼を覚まし、何事が起ったのかと不審を抱かせることになってしまいますね。これまた作者の不注意とすべき点ですが、ペリオン王は広間で赤々と燃える3本の松明の明りの下で、エリセナの身体の美しさに見とれていたと書いていますが、作者自身それよりも前に、広間には戸口を通して入ってくる月光の他には明りとてなし、と書いたことを忘れていすし、そのうえに、どんなふしだらな女性であっても、男性と会った最初のときから、どんなに彼を愛していたとしても、そんな格好の姿を見せるような者はないということに考えが及んでいないのですよ。これも同じ不注意ですが、ペリオン王は、剣がすでに出発の日の10日前に盗まれているのに、その出立時までそれが無くなっていることに気が付かないという、話の運びになっていますが、これも作者が、ペリオン王を回国の騎士としたこと、また回国の騎士には剣が、物書きのペンのように、その身から離せないものであることを忘れてしまったがためなのです。つまりこんなにいろいろありますので、いわれのないあらさがしをしなくとも、作者は内容の点でいろいろ間違っているといえると思いますが、皆さん方どうでし

ようか。

P. その内容の間違いについて、あなた様が、それは昔の古いことだが見過ごせないとおっしゃるところ、ごもっともですね。

M. しかしですね、よく “Quandoque bonus dormitat Homerus” ともいいますので註⁴⁰、それで大目にみておきませんか。

P. いやそんな大目にみ方は根拠が薄弱ですよ。しかし、私としてはその作品の値打はどうであれ、あなた様のお話を伺って、これまでは仲々納得できなかったこと、つまり、この種の架空の物語りの何か一冊をきっちり読むためには、日常語に通暁するだけでなくそれ以上のものが必要だということが信じられるようになりましたね。

〔続く．1983年12月〕

註 記

1) 直接補語になる名詞の直前に前置詞 *a* を配し、その機能を明示化しようとする処置は、かなり組織的に、すでに Cid に現われてきている。

Tú ... val a mio Çid. (241)

Veré a la mugier ... (2286)

cfr. Veremos vuestra mugier ... (210)

2) Dixo la leche al vino ... : 「牛乳はぶどう酒に、“やあ君、よく来たね” といったとは、ぶどう酒はいつなんどき飲んでも無害の飲み物だ、と教えたものか(?)。 Después de la leche nada echas (牛乳の次には何も入れるな→牛乳を飲んだあとには何も飲んではいけない、お腹に悪いから) という諺もある。

3) No diga ninguno ... : 「だれも、“私はこの水を飲まぬ” とはいうな」とは、他人に起るのと同じことがいつ何時、自分にも起るかもしれないので、あまり口はばったいこととはいうな、と教えた諺。これはテキスト 69 ページには、Niguno no diga : dêstagua no beberé となる形がある。これは近代語としては、否定の副詞 *no* に先行する他の否定詞があるということから、非文法的な文になる。

4) テキストでは *propiedades* という名詞を用いている (pág. 159)。

5) Siempre te bien quise ... : 「私は常々お前を可愛がってきたが、お前によくしたことはなかった」とは、口でいうことはたやすいが、それを実行することのむづかしさを教えたものか。なお、ここで Valdés のいう文中での動詞の位置、つまり、動詞を文尾に配置するという現象は、15世紀、16世紀の教養主義的な文体の特徴であった。

この傾向は次のような場合に表われている。

Calisto. — En esto veo, Melibea, la grandeza de Dios.

Melibea. — ¿ En qué, Calisto ?

Calisto. — En dar poder a natura que de tan perfeta hermosura te dotasse e

facier a mí inmérito tanta merced que verte *alcanzasse* e en tan conueniente lugar, que mí secreto dolor manifestarte *pudiesse*. (La Celestina, I, Clásicos Castellanos, No. 20 ; págs. 31–32)

- 6) ウレニャ伯 (conde de Ureña). テキスト, 169ページにみられるように, ローマの哲学者, 政治家, ボエチウスの著, De Consolatione Philosophiae は1518年, Sevilla で, Jacobo Cromberger によりカスティリア語に翻訳されたが, この翻訳が献呈されたのが, ここにいうウレニャ伯であった。
なお, この部分の末尾には欠落がある。これはテキストでは, 160ページ, 6行目に当る。
- 7) Ama a quien no te ama, y responde a quien no te llama は, この後に *andarás carrera vana* を付け加えて使ったらしい。全体の意味は, 「お前を愛さぬ者を愛し, お前に呼びかけぬ者に答え, 無駄な道を歩けばいい」とは, お人好しも程々にせよと教えたものか。
- 8) Quien guarda y condesa, dos vezes pone mesa: 「ものを大切にしまい, 節約する人は, 2度食卓の用意をする」とは, 日頃から節約に心掛ける人は, いざというときにも困らないことを教えたもの。
- 9) Qual la madre, tal la hija, y tal la manta que las cobija: 「母が母なら娘も娘, その2人を覆う毛布もまた毛布」とは, この母親にして, この娘ありといて, 2人の間に共通するいやな面を強調する表現。
- 10) Del monte salle...: 「山からはその山に火をつける者が出てくる」とは, 我々は近い者, 親しい者からいろいろ被害や迷惑をこうむりやすいことを教えた諺。既出, テキスト45ページ。
- 11) この種の類音語尾使用 (similicadencia) は15世紀以降散文にも盛んであった。15世紀では, Corbacho と Celestina に多用されている。この傾向は16世紀にも受継がれ, Antonio de Guevara の作品などにこれが現われてくる。
- 12) Juan de Mena (1411~1456) は15世紀イスパニア詩壇を支配した超教養主義の旗手となった詩人である。彼は韻文のための言語は, “el rudo y desierto romance, la humilde y baja lengua de romance” (粗野で無乾燥な日常語, 下賤で低級な日常の言語)” とは一線を画したものでなければならぬと主張し, この言語の創造を目指して奮闘した。ここでいう「運命の迷路」とは, 原名 Laberinto de fortuna, 別名 Las Trescientas で知られる代表作のひとつで, 1444年に出版された。なお, Antonio de Nebrija はこの Mena を高く評価し, その詩論の中に彼の作品をしばしば引用している。
- 13) rostro jocundo (陽気な顔つき) [jocundo < iucundus] ; fondón del polo segundo

(第2極の底の底) [fondón < fondo + ón; fondo < fundus]; cinge toda la esfera (それは全世界をとり囲む) [cinge = ciño; cingir < cingere]. ここで Valdés の問題とする語は, jocundo, fondón, cinge と思われる。

なお Valdés がここで引用した語句は, Mena のもうひとつの作品, Coronación の中にみられる。

- 14) 詩歌大全: テキスト (pág. 164) では Cancionero general となっている。これは原題を Cancionero general de muchos y diversos autores とし, Hernando de Castillo により編纂され, 1511年に初版が出た詩歌集をいう。15世紀の韻文の一大選集であり, とくに Reyes Católicos の時代の詩人の作品が多いといわれる。
- 15) Garcí Sánchez de Badajoz (1460? ~ 1526). Lamentaciones とか Infierno de amor などの作品で有名となった詩人。
 Bachiller de Torre: 愛の歌の作者として当時知られていた詩人か? Torre という苗字の詩人には, 当時他に, Alfonso de la Torre, Francisco de la Torre という有名な2人がいる。
 Guevara: 上記の Cancionero に作品を残した詩人のひとりで, すでに Enrique 4世 (1425 ~ 1475) の時代に創作活動をおこなったと考えられる。
 Marqués de Astorga: 上記の Cancionero に作品を残した詩人のひとりで, この歌集大全の詩歌全体に流れる単調さとは対照的な, イメージ鮮やかな作品を書いたことで知られている。
 Jorge Manrique (1140? ~ 1478) の作品はとくに16世紀に盛んに印刷され, 愛読された。
 Juan del Encina (1468 ~ 1529): 多芸多才な人で, 音楽, 叙情詩, 戯曲の面にとくに傑出していた。なかでも, Encina はイスパニア演劇の創始者と目されるが, その作品でここに挙げられている Egloga de Plácida y Vitoriano は1513年, ローマで枢機卿 Arborea 師の面前で上演されたともいわれている。
 Bartolomé de Torres Naharro (? ~ 1531): ここに挙げられている作品, Propaladia は1517年にナポリで出版されたもので, 戯曲叢書とでもいうべき作品集である。ここに現われた, Aquilana, Calamita も Torres de Naharro の作品である。
- 16) Felino y Zambardo: Egloga de Felino, Zambardo y Cardonio といい, Juan del Encina の牧人劇のひとつ。
- 17) Yanguas: Hernán López de Yanguas は聖餐小劇 (farsa sacramental) やその他の戯曲の作家であった。
- 18) Pues que os vi, merecí ... (あなたに会ったことで, 私はあなたに会うに相応しき者となった) は文全体が過去で, 何ら現在には言及しないが, Porque ... (あなたに会ったので, 私は今やあなたに会うに相応しき者である) は, 現在への言及が中心となる表現形式である。また接続詞の porque は理由の接続詞としては代表的なもので, pus que に比べてはるかに明示的であるといえる。

- 19) この歌は Florencia Pinar の作で, Cancionero general に収められているらしい。
- 20) この歌は Lope de Sosa の作で, Caneionero general に収められているらしい。
- 21) 詩歌大全(註14参照)はそれまで出版されたもののうちで, 詩歌の量, 種類の点でも最高の歌詩集と考えられる。ここには, それまでの有名詩人 128 人の他に, 無名詩人のものを合わせ, 合計 964 点の作品が収められている。またロマンセ (Romance: 物語詩) も若干収録されているらしい。
- 22) Mote (洒落歌)は元々, 騎士がその盾, 紋章などに刻み込んだ題銘をいったが, これが宮廷の催し事の場合などで詠み交される短い洒落歌をも意味するようになった。
 Invención (創案歌) は, 騎士の用いる題銘への韻文による説明をいう。
 Preguntas y respuesta (問答歌) は, 歌による遊びで, あることを問いかけ, これを機知を働かせ, 歌でもって答えるという形式のものである。
 Villancico (ビリャンシコ) : カスティリア叙情詩の最も素朴な形式のひとつで, 歌全体は短く, 通常は 2 ~ 3 行の繰り返し連と内容説明連とをもつもの。
- 23) 註 5) 参照のこと。
- 24) Arcidiano del Alcor: Alonso Fernández de Madrid (1475~1559) のこと。ここにいる Enquiridión の翻訳は 16 世紀前半には, 版を重ねること数版にも及んだといわれている。
- 25) イタリア人古典学者たちはエラスモのラテン語を軽侮していたらしい (Clásicos Ebro, No. 18, Diálogo de la lengua, pág. 118, Nota 284)。
- 26) Peregrino: これはイタリア人 Jacobo Caviceo が書いた Il Peregrino (1508) をいうと思われる。Hernando Díaz により, 1527 年, Historia de los honestos amores de Peregrino y Ginebra として, カスティリア語に翻訳されている。
 Cortesano (廷臣論) は Juan Boscán により 1534 年にカスティリア語に翻訳された。
- 27) このテレンティウスの逐語訳的意味は, 「その点について, あなた方は私にとって事態の発動者なのか」となる。
- 28) このラテン語文の逐語訳は, 「おお, よくなされたることよ, おまえは私を幸せにしてくれた」となる。

- 29) Amadís de Gaula : 1508年に出版された、騎士道物語の最高峰とされる作品、すでに Valdés はこの作品について、これまでに2回言及している (テキスト, 13及び129 ページ)。
- 30) Palmerín : Palmerín de Oliva : 上記 Amadís de Gaula とは傾向を異にする騎士道物語, 1511年刊。これを継承したものが Primaleón で, 1512年刊。
- 31) Esplandián (1510), Florisando (1510), Lisuarte (1514) は夫々, 上記 Amadís シリーズの第5, 6, 7巻に相当する。
Cavallero de la Cruz も1521年刊の騎士道物語, 原題は, Lepolemo, llamado Caballero de la Cruz という。
- 32) Guarino Mezquino 以下 Valdés の挙げた騎士道物語は全部フランス語からの翻訳である。
なお, セルバンテスはドン・キホーテ, 前篇, 第6章で, これらの騎士道物語の多くを焚書の刊に処している。
- 33) Valdés は, solaz についてはテキスト 122ページ, sazón については 121ページですでに言及している。
- 34) 近代イスパニア語の接続法過去 -ra 形は語源的には, 直説法過去完了であって, 16世紀においては, いまだこの機能が優勢であった。なお, -ra形のこの機能は現代語, とくに文語に残っている。
- 35) 註5) 参照。
- 36) この一節は Amadís de Gaula, 第I巻の冒頭の部分にみられるが, ここは Valdés のいうように, 《... fue un rey cristiano en la pequeña Bretaña, por nombre llamado Garínter, el cual era en la ley de la verdad de mucha devoción e buenas maneras acompañado.》となっている版もある (Amadis de Gaula, “Sepan cuantos ...”, Núm. 131, pag. 3). なお, 次に Valdés が言及する一節も同巻, 冒頭の部分にみられる文である。とくにここで取扱われている問題は, 文の相互関係, つまり, 並置か従属かというむづかしい問題に関係している。
- 37) このような, 代名詞弱形と動詞との間に, 主格人称代名詞や小詞 (たとえば否定の副詞の non) を挿入する現象は, 中世イスパニア語の大きな特徴である。すでに, Cid では, 通常的位置をとる文構造 “non derranche ninguno fata que yo lo mande” (703) に対し, “si les yo visquiero, serán dueñas ricas” (835) がある。
- 38) キリスト受難は A.D. 33年。
- 39) Perión, Elisena は Amadís de Graula の主人公となる恋人2人の名前。

- 40) Quandoque bonus...= Con frecuencia dormita el buen Homero:「かの立派なホーマーでさえしばしば居眠りをする」とは、「弘法にも筆の誤り」のこと。これは Horacio (ホラティウス) がその「詩論」の中でいったことばとされている。